

学びのたより

東海国語教育を学ぶ会
2012年7月21日
文責：JUN

国語科の学び、文学に偏っていませんか？

学校を訪問すると、わたしはすべての教室の授業を参観します。もちろん、その学校の教師たちとともに特定の授業を参観し、その事実をもとに協議することが中心になりますが、授業を公開するのはその特設授業だけではないようにしてもらっています。それは、すべての教師が自らの授業を公開するという状況をつくることで、その学校の教師一人ひとりが同じ立場に立てると考えるからです。すべての教師が授業を公開する態勢がとれない学校では、授業を大切にする学校はできません。

こうしてわたしは、学校の門をくぐれば、すべての教室に足を運んでいます。その際、公開される授業の教科はさまざまです。学びはそれぞれの教科に応じて生まれるわけですから、特定の教科だけを対象にしないほうがよく、この傾向は歓迎すべきことです。けれども、わたしの訪問に合わせて教師たちが公開する授業の約半分は国語科です。それは、国語教育に取り組んできたわたしへの期待だとも考えられますが、それだけではなく、国語、つまりことばの学びの重要性を考えてのことだと思われれます。わたしの訪問だということと関係なく、それはとても理解できることです。

けれども、日々、国語科の授業を参観しながら、このままではよくないのではないかと考えていることがあります。それは、わたしの訪問に合わせて行われる国語科の授業が、あまりにも文学、つまり物語文を読む授業に偏っているからです。日本の文学教育の歴史がそうさせているところもあるのですが、文学の読みは国語科の学び、ことばの学びの一部でしかないということをもっと考えないといけません。人がその生涯を通じて大切にしなければならない「ことば」は、文学におけることばだけではないのです。

1. 漢字と語彙と文法

わたしたちは、赤ん坊のときから体験的にことばを獲得し続けています。ですから、一年生の子どもたちも、入学したときから当たり前のように日本語を口にしています。もちろん一年生の一学期にはひらがな五十音を学習し、続けてカタカナ、漢字と、文字の学習は続けられますし、ことばのきまり、文のきまりのような文法的な学習も行っています。しかし、こうした学びにある程度の時間を割くのは一年生だけで、それ以降は、ことばそのものの学習に割く時間は激減しているようです。

ことばそのものの学習でわたしがしていたことはどのようなものだったのでしょうか。まず、漢字の学習を単なる反復習熟の学習にしないようにしていました。漢字は一文字一文字に意味があります。その意味を探ることで、たとえ読めない漢字が出てきたとしても、何らかの類推をすることができます。わたしは、そういう文字にこめられている意味を大切にする漢字学習を心がけていました。そのような学び方が行き着いたのが、岩波書店から発刊された『シリーズ授業1・漢字の字源をさぐる』に収められた授業でした。

文法の学習については、その学年に必要な「文のきまり」を意識して、年間通して「おもしろいぞ、文のきまり」というような学習をしていました。文学を読む授業では、ほとんど文法そのものの突っ込みはしませんでした。あくまでも文学の味わいに徹していたのです。けれども、別の時間に、文はどういうきまりのもと成立するのか、文と文との関係を考えてどんなことが見えてくるのか、それをおもしろく学べるように教材化して授業していたのです。

とは言っても、わたしは言語学者ではありませんし、言語学を専門に学んだわけでもありません。とにかくこれはという書籍を読んで理解したことをもとに、子どもが学べるものに教材化したのですからそれは万全なものではなかったでしょう。それでも、わたしの国語の授業はこの学び抜きにはあり得ませんでした。

文字と文のあり方の学びなしに、文学も読めないし、味わえないのです。文字や文に敏感な子どもにする営みを欠かすことはできません。

2. 作文

わたしがかなりの時間を割いて実行していたことで、今の教室ではその半分の時間も割いていないのではないかと思えることがあります。それは、作文の学びです。

文学の授業の中で、書き込みや吹き出し、感想文、振り返りなどを書かせる教師はたくさんいます。もちろんそれはそれで大切なことです。けれども、わたしが述べたいのは、そういう「書くこと」ではなく、作文なのです。

断片的なものではなく、ある程度まとまった文章を「作文」として書くということにどういう意味があるのでしょうか。わたしは、そこには、とても大きな意味があると考えています。物事を認識し、思考し、自分を、自分の生きる世界を見つめるために、文章にすることとは大変大きな意味があるのです。

わたしは、低学年から、体験したことを描写するように書くという作文を毎月のように書かせていました。中学年からは、それだけではなく、何かを説明するように書くという作文も年間複数回書かせていました。たとえば、「わたしのお母さん」というタイトルで、母のいろいろな出来事や事柄を整理して、自分の母親像を組み立てて書くという書き方です。この二つの書き方は、わたしの作文教育に欠かせないものでした。最初の書き方は、ある時の事実をじっくり見つめる目を養い、後の書き方は、物事を全体的・総合的にとらえる目を養うものだと考えていました。この二つの目は、子どもの認識を深めるうえで、

なくてはならないものだと考えていたからです。

しかし、そのような目が、年間に一つや二つの作文を書いたところで身につくはずはありませんでした。わたしの教室には、子どもは面倒がり、好きにはならないことではあったけれど、「書く」ということはやらねばならないことになっていたのです。

わたしがあまりできなかつたことだけれど、大切にしたい書き方がもう一つあります。それは、優れた文章を読み、それを要約するということです。

描写文は詳しく描くことをよしとします。それに対して、要約文は書かれていることを短く表すことが大切になります。要約文の書き方は、書かれていることを焦点化してとらえる読み方をはぐくむとともに、そのために文章の構造をとらえる力を養います。稲垣忠彦先生の著書『日本語を学びなおす』（評論社）にはその具体的な授業が詳述されています。

ただ、それらの作文教育を実行するには、教師であるわたしが、子どもたちの書いたものをなるべく早く、きちんと読み、書かれていることに対するコメントを届けるということに欠くことはできませんでした。そして、わたしもまた、書くという行為を怠けることはできませんでした。自分が書かないのに子どもにそれを要求することはできなかつたからです。

書くことと読むことは裏表の関係にあると言われていています。本当に読むことに没頭できる人は、書くことをいとうことはありません。

3. 読書

子どもたちのことばを育てるために、ことばの世界を豊かにするために、ことばを介した楽しみを味わえるようにするために、わたしが大切にしてきたことにもう一つあります。それは読書です。

わたしは、教室に「学級文庫」を設置していました。カラーボックス3つほどを置いて、わたしが所有する子どもの本をそこに並べました。学校には図書館があり、子どもたちも自分の本を持っているでしょう。けれども、わたしは、教室にたくさん本がなければならぬと考えていました。それは、手を伸ばせばそこに本があるという環境こそが、子どもを本好きにすると考えていたからです。

わたしの教室では、給食の配膳時間は学級文庫の本を読むと決めていました。当番の子どもが給食を配り終わるまで、子どもたちは静かに本をよんでいました。もちろん、朝の読書も毎日行っていました。朝も昼と同じように子どもたちそれぞれが好きな本を読む時間なのですが、一週間のうちの一日は、わたしの読み聞かせやブックトークを行いました。わたしは月に一冊は新刊を持ち込むことにしていて、それを子どもたちはとても楽しみにしていたようです。上着の中にだれも見つけない本をかくして教室に入り、わくわくしている子どもをじらしてから取り出し読み聞かせる、それは私の至上の楽しみでした。

子どものことばの世界は、子どもが触れることばの質と量によって左右されます。どの

ような質が保証できるかは、教師が何をもちこむかということとその持ち込み方によります。その一方で、とにかくたくさんのことばに触れる機会をつくることも大切です。そういう意味で、読書は欠かせない営みなのです。

もちろん、教師自身が読書の楽しみを味わっていないのに、それを子どもに要求することはできません。「読みなさい」と言い、読む時間を設けることはできますが、それだけで子どもが読書に夢中になることはありません。読むことがおもしろくてたまらないという子どもの心は、読むことを楽しみにしている教師によってもたらされるのです。

4. 豊かなことば体験こそ

国語の教科書に掲載されている題材を順番にこなすだけでは、子どもたちに豊かなことば体験を保証することはできません。確かに教科書には、物語だけでなく、説明文も掲載されているし、ことばのきまりを学習するページも、話すこと聞くことを学ぶページもあります。作文も書くようになっていきます。もちろん、漢字の学習も年間を通して行うことになっています。けれども、それを掲載されている順にこなせば、子どものことばは豊かになるでしょうか。教科書は少ないページ数の中ですべての分野を総花的に取り上げるように編集されています。ですから、どうしても量的に限界があるのです。豊かなことば体験は、教師が準備し、組み立て、願いと期待を込めて具体化する一つひとつの学習によって現実のものとなるのです。

その言語体験をある分野だけに偏ったものにしないことです。文学の授業をこよなく愛することは悪いことではありません。けれどもそれだけに熱心なのは、子どものことば体験は決して豊かになりません。そして、それは文学の読みにも影響を及ぼし、その読みも豊かにならないのです。ことばそのものを豊かに味わえなければ、そうなることは必然だからです。子どもが豊かに作品を読めないのは、文学の授業における教師の指導の問題だけではないのです。子どものことばに対する感性を育ててこなかった国語教育全体の問題なのです。

説明文を読むことも、作文を書くことも、漢字を文字文化として学ぶことも、文のきまりを学ぶことも、読書をする 것도、一年を通して継続的に実施するようにすることです。ことば体験は、一朝一夕では実を結ばないからです。すぐには結果が出ないけれど、とにかく持続的に経験を積むようにすることです。そういう総合的なことば体験を教室に実現することです。

そういうことからすると、わたしの学校訪問時にも、文学以外の授業について検討・研究することがもっとあってよいでしょう。それがほとんどないということは、わたしが本号で述べているような「ことばの体験」が希薄になっている証ではないかと思っています。

とりあえず、作文の授業を見たいものです。書くことであふれている教室に出会いたいものです。秋は、この私の提言に応えてくれる学校が生まれることを楽しみにしています。